

Evangelicals と Fundamentalist の

用語における歴史的考察

青木保憲

はじめに

映画 『ジーザス・キャンプ』 に散見する問題点

ジョージ W. ブッシュ政権第二期時代の 2006 年、一本のドキュメンタリー映画がアメリカで公開された。公開規模はさほど大きくなかった。しかしその内容がセンセーショナルであったため、映画は日本でも紹介され、DVD も発売された。タイトルは "Jesus Camp" (邦題は『ジーザス・キャンプ〜アメリカを動かすキリスト教原理主義〜』) である¹。

映画は、「共和党ブッシュ政権を支持する「福音派」と呼ばれるキリスト教徒が、現在のアメリカを自分たちの意のままに操ろうとしている」と警告を発する内容となっている。具体的には、とある牧師が主催する小学生向けのサマーキャンプの様子を紹介し、そこで行われている奇異なイベントにフォーカスが当てられている。例えば、幼い少年少女がブッシュ大統領の等身大ポスターに手を伸ばし、涙を流しながら、神からの力を受けることができるよう祈りをささげている。別の場面では、中絶を容認している政府機関に対して「悪魔よ退け！」と声高に叫び、政府要人を模したコップに対してハンマーを打ち付けている。このような場面を見せつけられると、確かに「洗脳」の恐ろしさを感じ

¹ DVD『ジーザス・キャンプ〜アメリカを動かすキリスト教原理主義〜』(株式会社アニプレックス、2006 年)

ずにはおれない。そして、一連の活動を陰で操っている福音派からアメリカを取り戻せ、と映画製作者はメッセージを発している。

ここで問題としたいのは、この牧師が実践しているキャンプの中身ではない。劇中に登場するラジオ DJ が、「アメリカをおかしくさせている輩」として、Evangelicals と Fundamentalist を区別せずに用いている点である。さらにこの日本語字幕では、二つを共に「福音派キリスト教徒」と訳し、時には「キリスト教原理主義者」と訳し出す箇所も散見する。

果たして Evangelicals は Fundamentalist と同義なのか？ もし違うカテゴリーであるとしたら、その違いとは何か？ どうして混同されるようになってしまったのか？ さらに訳語の問題として、Fundamentalist を「キリスト教原理主義者」と表現することは、的を射たものであるのか？

ここに福音派 (Evangelicals) をめぐる用語の混乱が存在し、かつ各々に対する訳語の問題が、その混乱をさらに複雑なものにしている現状を見ることが出来る。

本論文は、このような用語の混乱を整理し、19 世紀後半から現代までの主な事象を取り上げつつ、歴史神学 (主にアメリカ宗教史) の観点から、21 世紀の福音派を方向づけることを目的としている²。特に着目しているのは、「福音派」と、福音派が政治化したと言われてきた「原理主義者」との峻別を 21 世紀の視点で考察することである。1980 年代以降、この峻別作業は常に必要だと叫ばれてきた。しかし現在に至るまで未だに明確な回答は為されていないのが現状である。筆者も 2012 年に上梓した拙著『アメリカ福音派の歴史 聖書信仰にみるアメリカ人のアイデンティティ』では、この辺りをばかしてしまったことを正直に告白する。

1980 年代に曖昧さを内包したままで導き出された「福音派」の定義は、それから 30 年以上を経る中でどのような質的变化を遂げたのであろうか。この作業を行うために必要なことは、Evangelicals の歴史研究の宿命とも言える用語問題を整理するところから始めなければならない。「福音派」「根本主義」「原理主義」

² なぜアメリカか？ と問われるなら、日本への福音主義の伝播に対するアメリカ教会の貢献は、他国のそれと比較してもかなりの比重を占めており、その影響力は今なお衰えていないと筆者は考えているからである。

「キリスト教原理主義」等々の用語に内包される誤解と混乱の現状を次章では紹介する。そして、それらが生じた原因と歴史的過程を叙述することで、用語を再整理してみたいと思う。

第 1 章 Evangelicals と Fundamentalism

Evangelicals の起源とその展開

アメリカの歴史において、1776 年の建国以来 19 世紀後半 (1870 年代) に至るまで、人々は自らを Evangelicals と称していた。これはドイツ語の evangelisch に由来する用語で、当時の人々にとっては、「宗教改革の伝統 (聖書の権威とキリストの十字架による罪のあがない)」を遵守して生きていることの簡潔な表明であった。つまり Evangelicals とは、プロテスタント全般を意味する一般的な用語であった³。

多くの人々が Evangelicals という言葉を知り、これが市民権を得たのは、前述の時代から 100 年後の 1976 年である。この年、ジェームズ・アール・カーター・ジュニアは第 39 代合衆国大統領となった。彼は民主党内の予備選挙の時から、新生体験 (born again) している敬虔なキリスト者であることを憚ることなく語り、自らを「福音派 (Evangelicals)」と表明していた。『ニューズ・ウィーク』1976 年 9 月 13 日号では、彼の生い立ちから現在までの信仰歴が 20 ページに渡り特集され、「福音派」という用語は、人々の耳目を集めた⁴。ウォーターゲート事件で「大統領職」に対してダーティーなイメージを抱いていたアメリカ国民は、カーター大統領を素朴でクリーンな人柄であると評価し、彼が表明した「福音派」にも肯定的なイメージを抱いていた。

ここで注意しておきたいのは、同じ Evangelicals を称する人々が、異なる二つの時代に存在していたという事実である。19 世紀の Evangelicals (プロテスタント教会)、そして 1960 年代以降の Evangelicals (福音派) である。さらに、Evangelicals という言葉を人々が「発見」したのは、1970 年代後半であるという事情も加味しなければならない。マスコミを中心とし、「Evangelicals とは？」

³ 小原克博・中田考・手島勲矢『原理主義から世界の動きが見える—キリスト教・イスラーム・ユダヤ教の真実と虚像』(PHP 新書、2006 年) 106 頁

⁴ Peter Goldman, "Sizing Up Carter," *Newsweek*, September 13, 1976, 18-40.

と問い始めたアメリカ人にとって、「Evangelicals」を自称するキリスト者たちがいつの間にか自分たちの周りに存在し、かつ増え広がっていたことは少なからず衝撃であった。彼らは、南北戦争以前に自らを Evangelicals と称していた人々のことを探り当てた。そしてカーター大統領に代表される 1960 年代以降の Evangelicals と、南北戦争以前のプロテスタント教会全般を意味する Evangelicals とを短絡的に結び付け、「100 年前からカーターのような福音派が米国には存在していた」とする誤解を生み出したのである⁵。

Fundamentalism の起源とその展開

一方、Fundamentalism はどうか。この用語の場合も Evangelicals 同様、異なる二つの時代に同じ言葉で一括りにされた人々が存在していた。

1890 年代に端を発する聖書の無謬性をめぐる争いは、次第に各神学校内で大きな論争となっていく。そして聖書批評学を受け入れるか否かをめぐる争いは、長老派教会、バプテスト教会に代表されるメインライン諸教派を真二つに分裂させる事態にまで発展していた⁶。聖書批評学を受容し、従来のプロテスタント教会の教えを人間の手で変革する方向に舵を切った人々は、「モダニスト(modernist)」と呼ばれた。一方、そのような変化を頑なに拒否し、教理的・道徳的に保守的な立場を選択した人々がいた。彼らは 1910 年から 1915 年にかけて、全 12 巻からなる論文・証集『根本的なもの—真実への証 (The Fundamentals: A Testimony to the Truth)』を発刊した。これは全部で 300 万部を超えるベストセラーとなり、アメリカだけでなく、イギリスにも送られた⁷。

1920 年、「世界根本主義協会 (World's Christian Fundamentals Association)」の第一回大会で、『ウォッチマン・エクザミナー』誌の編集長であり、自らも協会

員であったカーティス・ローズは、「根本的な教義のために戦う備えのできている者」という意味を込めて、「Fundamentalist」と自分たちを称した⁸。彼らは確かにモダニストたちを共通の敵とした。しかしこの対立は、決して暴力的なものではなく、むしろ聖書の解釈をめぐる神学的議論であった⁹。

一方 1980 年以降、同じく Fundamentalist と呼ばれた人々が存在した。彼らの母体は福音的なキリスト教会で、一部のテレビ伝道師や牧師たちがこの運動のリーダーとなっていた。彼らは中絶や同性愛などの道德問題に対して反対を唱え、アメリカを保守的な方向へ修正しようと試みていた。彼らはリベラル化する現状を憂い、これらの要因をキリスト者の宗教的墮落ととらえたのである。そしてこの一連の問題を解決するために、デモや過激な選挙運動を展開することで政治を動かそうとした。時には一部の過激な集団が、中絶手術を施した医師や同性愛者に対して、暴力的制裁を加えたりもした¹⁰。このような過激な言動に訴える人々のことをマスコミは Fundamentalist と呼んだ¹¹。

では、どうしてマスコミは 1980 年代の彼らを Fundamentalist と呼んだのだろうか。それは 1979 年にイスラム革命がイランで発生していたことに端を発する。この革命はイスラムの教えに人々を原点回帰させることを目指していた。1980 年代以降、彼ら頑迷な保守派を支える精神的支柱として、「イスラム原理主義 (Islamic fundamentalism)」という言葉が流布しつつあった。同じ時期に国内外で発生した二つの過激な集団に対して、マスコミは同じ頑迷さを見出したのである。結果、政治化した保守的キリスト教徒たちを彼らは Fundamentalist と名付け、侮蔑的な意味合いをそこに込めた¹²。

ここに Evangelicals と同様、Fundamentalist にも同じような混乱が生じてしま

⁵ “Southern Baptists: Platform for Presidents,” *Christianity Today*, July 16, 1976, p.998.

⁶ この一連の論争に関する詳細は、以下の文献を参照のこと。

George Marsden, *Fundamentalism and American Culture*, second edition, (Oxford: Oxford University press, 2006 [2008]).

Joel Carpenter, ed., *Fundamentalist Versus Modernist the Debates between John Roach Straton and Charles Potter*, (New York: Garland Publishing, 1998).

⁷ Ernest Sandeen, *The Roots of Fundamentalism: British and American Millenarianism 1800-1930*, (Grand Rapids, Mich.: Baker Book House, 1970), p.198.

⁸ Curtis Lee Laws, “Convention Side Lights,” *Watchman Examiner*, VIII, July 1, 1920, 834. See Marsden, *American Culture*, p.159.

⁹ 森孝一「福音派がキリスト教原理主義者か？」日本政治学会 2005 年度研究会、分科会 16 「アメリカの政治と宗教」2005 年 10 月 2 日発表。

¹⁰ マーク・ユルゲンスマイヤー『グローバル時代の宗教とテロリズム いま、なぜ神の名で人の命が奪われるか』古賀林 幸、櫻井元雄訳、(明石書店、2003 年) 第二章「キリストの兵士たち」参照。

¹¹ 森孝一、前掲研究発表。小原『原理主義から世界の動きが見える』142 頁

¹² 小原、前掲書。

った。1920年代の Fundamentalist は聖書の中身を精査する神学論争に関与した人々であり、自らの立場に誇りと自信を持った人々が、自分たちを指し示すために用いた名称である。一方、1980年代の Fundamentalist はアメリカの道徳的問題に対して、政治的力を用いて解決しようと行動した人々である。しかし名称はマスコミのある種「レッテル貼り」によって生み出されたといっている。そして多くの人は、1980年代の Fundamentalist のような過激で頑迷な人々が100年ほど前からすでにアメリカ社会に存在していた、と誤解してしまったのである。

Fundamentalism と Evangelicalism をめぐるさらなる混迷

Evangelicals と Fundamentalist は、各々異なる二つの時代に別々の特質を持って存在していたが、この違いが峻別されることなく研究者やマスコミに乱用されてきたことは、前述した通りである。しかしこれをさらに混迷へと陥れてしまう現象が生まれてきた。

1980年以降に政治化した保守的キリスト教徒たちは、Fundamentalist と揶揄されることを嫌った。そして彼らは外部からのレッテル貼りを否定し、自らを Evangelicals と宣言したのである。例えば、「宗教右派 (Religious Right)」と呼ばれ、Fundamentalist の代表的人物であったジェリー・ファルウェルは、Evangelicals の教会に対し「同じ福音的教義に立つ兄弟たち (our evangelical brethren)」と呼びかけ、「私たちは皆さんと同じだ。聖書を信じる兄弟として、キリストを愛している者として、私たちを受け入れてほしい。」と訴えた¹³。

こうして、1980年代以降の Fundamentalist と、カーター大統領誕生以降に注目を集めた Evangelicals は、その境界線が薄められ、いつしか一体と見られるようになっていった。両者が同じ用語で自らを語りだしたとき、人々は1960年代以降の Evangelicals すべてを、時代遅れで偏った聖書理解に基づき、政治的な手段に訴えてでも自分たちの主張を押し通そうとする Fundamentalist だと思ひ込むようになったのである。

¹³ Jerry Falwell, Ed Dobson and Hindson, eds, *The Fundamentalist Phenomenon: The Resurgence of Conservative Christianity*, (Doubleday, 1981), p.223.

英語圏の研究者の間でもこのような「ねじれ現象」が起こっていたのであるから、ましてや日本の研究者、マスコミにおいては、さらにこのねじれ度は激しいものとなったことは想像に難くない。前節でみたように、Evangelicals と Fundamentalist は共に19世紀から現代まで一貫して存在しているという誤解を受けるようになった。両者は1980年代に同義であると思われ、ファルウェルらに代表される集団—頑迷で奇異なキリスト信者たち—が建国以来ずっとアメリカには存在し続けてきた、と誤解されるようになっていった。さらにここに訳語の問題が絡んでくる。

1920年代にモダニストと戦った人々が自称 Fundamentalist であったことから、日本の研究者はこれを1980年代の Fundamentalist と区別せず、「Fundamentalist = 原理主義者」と固定化し、平板化してしまったのである。一方、研究者の訳語に追従したマスコミは、ファルウェルらが自らを Evangelicals と表現していたことを踏まえ、「Evangelicals (福音派) = Fundamentalist (原理主義者)」とみなした。そして日本人研究者とマスコミは、「原理主義者」でありその精神的支柱に聖書の教理を据えている「福音派」を統合する用語として、「キリスト教原理主義 (者)」を創出したのである。そして曖昧なイメージをまとったこの言葉だけが独り歩きを始めてしまった¹⁴。

このような混迷を避けるために

以上、Evangelicals と Fundamentalist をめぐる誤解と混迷の過程をひもといてきた。ではこのような誤解を避け、混迷した状態から抜け出すためには、一体どうしたらいいのであろうか。

少なくとも、19世紀末までの Evangelicals と1960年代以降の Evangelicals、そして1920年代の Fundamentalist と1980年代の Fundamentalist をはっきりと分

¹⁴ 代表的な書籍は、以下の2冊を参照。

スーザン・ジョージ『アメリカはキリスト教原理主義・新保守主義に、いかに乗っ取られたのか?』森田成也・大屋定晴・中村好孝訳、(作品社、2008年)。原題は *Hijacking America: How the Secular and Religious Right Changed What Americans Think* である。どこにも「キリスト教原理主義」に相当する言葉はない。
坪内隆彦『キリスト教原理主義のアメリカ』(亜紀書房、1997年)。

ける訳語が必要である。本論文では、便宜上すでにこれを用いている。それは以下の通りである。

●Evangelicals の訳語

- ・建国から 1890 年代までの Evangelicals—「プロテスタント諸教会」
- ・1960 年代以降の Evangelicals—「福音派」

●Fundamentalist の訳語

- ・1920 年代までの Fundamentalist—「根本主義者」
- ・1980 年代以降の Fundamentalist—「原理主義者」

誤解を避け、混迷した状態から抜け出るために為すべき第二番目の事柄は、各々の概念の連関を考察することである。特に「原理主義者」がなぜ自らを「福音派」と言い得たのか、については歴史的省察を必要としていると言える。「プロテスタント諸教会」が「福音派」となるのは、緩やかなまとまりであったものがその輪郭を明確にしてきた、ということで説明できる。また、「根本主義」と「原理主義」が同類項にされた理由も、共に聖書の保守的解釈を外部にアピールしたいという心情面では共通のものがあると考えることができる。そもそも時代が異なるため、切り分けも容易である。

しかし、Fundamentalist と Evangelicals をつなぐ媒介物は何であろうか。もしそのような媒介物が存在するとしたら、それは 21 世紀の現代でも有効であろうか。少なくとも、1980 年代ではこれら二つの用語が同時代に並立していながら、両者を峻別する基準はかなり曖昧であったと言わざるを得ない。これは、どうしてファルウェルは福音派陣営に対して「同じ福音的教義に立つ兄弟たち」と言えたのか、という問いでもある。

次章では、「根本主義者」たちがいかにして「福音派」となりえたのかについて、歴史的過程を見ていくことにする。

第 2 章 根本主義から福音派へ

スコープス裁判

1890 年代に始まった、いわゆる「ファンダメンタリズム論争」は、聖書の無謬性をめぐり、北部にあるバプテスト教会、長老派教会を各々二分する論争へ

と発展した¹⁵。しかし、決定的な裁定が下される事件が起こる。1925 年、テネシー州デイトンで、高校教師ジョン・スコープスが進化論を高校で教授したことに端を発する「スコープス裁判」である。彼は、当時の州法で決められていた「反進化論法」が果たして合法なものであるかと試そうとして、敢えてこの州法に挑んだのである¹⁶。このような挑戦をしようとする者が現れること自体、聖書の記述に疑義を感じる者たちが多くなってきていたことを表している。

「スコープス裁判」は、表面的には州法に違反したジョン・スコープスへの処遇を確定する裁判である。しかし本質的には、1920 年代の米国社会において、聖書の世界観（天地創造、出エジプトなどの旧約聖書物語）が、「実際にあった出来事」と認められうるか、が問われていたと言える。結果、スコープスへは有罪判決となり、罰金 100 ドルを支払った。しかしこれは事の本質ではなかった。むしろ特筆すべきは、聖書の世界観を必死に弁護した検察側の代表、ウィリアム・ブライアンと言動に対する人々の評価である。彼は聖書の言葉や物語を字義通り繰り返すことに終始したため、人々に「偏狭で狂信的な男」というイメージを与えてしまったのである。彼に貼られたレッテルは、そのまま「根本主義者」たちにも貼り付けられた。結果、彼らに賛同していた人々からの支持を急速に失っていくのであった¹⁷。

スコープス裁判以降の根本主義者たちは、モダニストたちとの戦いを継続することができなくなった。そして一時、歴史の表舞台から姿を消すこととなる。彼らはラジオや新聞、そしてキリスト教系雑誌から距離をとり、聖書学院 (Bible Institute) を設立した。その代表的なものは「ムーディー聖書学院」である。当時の学院に集う学生たちは、新聞や一般書籍を読まず、社会の出来事に関心を持つことが極端に薄かった。学院内では、ただひたすらに聖書を通して語られる聖霊に耳を傾けるという「バイブル・リーディング」という方法が採られて

¹⁵ 南部バプテスト教会、南部長老派教会内には、このような論争そのものを受け入れる集団すら生み出されなかった。

¹⁶ John Thomas Scopes and James Presley, *Center of the Storm: Memories of John T. Scopes*, (Rinehart and Winston, 1976), pp.57-62. See Willard B. Gatewood Jr. ed., *Controversy in the Twenties: Fundamentalism, Modernism, and Evolution*, (Vanderbilt University Press 1969), pp.338-341.

¹⁷ Marsden, *Fundamentalism and American Culture*, pp.185-187.

いた。この方法は、1930年代以降、多くの聖書学院に普及していった¹⁸。

新福音主義者の台頭

1930年代から40年代にかけて、水面下ではあるが根本主義者たちは誰からも非難されることのないやり方で、次第にその勢力を回復しつつあった。やがて聖書学院が充実してくるにつれ、自分たちの子どもにはもっと高等教育を受けたいと願う者が多くなってきた。1940年代半ば、彼らにはその願いを叶えるだけの経済力を得て、賛同者の連帯が築かれつつあった。事実、1929年から1940年にかけて、根本主義者の大学進学率は2倍になっている¹⁹。

根本主義者の次世代に対する願いに応じる形で、1947年に設立されたのが「フラー神学校」である。創業者チャールズ・フラーは、カリフォルニア州でオレンジ農園を経営していた父から受け継いだ遺産を元手に、ハーバード大学やシカゴ大学など、他のリベラル神学部に負けないアカデミズムを提供できる神学校を設立したいと考えた。そしてこのかじ取りをハロルド・オッケンガ、カール・ヘンリーたちに託したのである²⁰。

当時オッケンガは、北部長老派のパーク・ストリート長老派教会の牧師であった。彼は（自身を含めた）根本主義者たちをその偏狭さから脱却させたいと願っていた。彼らを一致させ、社会に受け入れられる新しい福音主義者となる道を模索していた。その成果として、チャールズから依頼を受ける5年前の1942年に、「全米福音派同盟 (National Association of Evangelicals : NAE)」を設立し、「ユース・フォー・クライスト」の専任伝道者であったビリー・グラハムと協力して、この路線を推し進めようとしていたのである。彼は NAE の初代代表に選出され、その第一回大会で、「根本主義者 (Fundamentalist)」という用語を捨てることを宣言し、これに替って「新福音主義者 (New Evangelicals)」という

言葉を用いることを提案した²¹。

一方ヘンリーは、ボストン大学から哲学博士号を取得し、オッケンガと同じく根本主義者たちを孤立的状況から解放し、学術的にリベラル陣営と肩を並べられるレベルにまで彼らを向上させようとしていた²²。彼は1944年に「福音主義学術推進会議 (Conference for the Advancement of Evangelical Scholarship)」を開催し、学術性向上にふさわしい新しい神学校の設立を提案していた。これを受けてのフラー神学校設立であった。

オッケンガ、ヘンリーらと共にフラー神学校の建て上げに尽力した仲間たちは、スクープス裁判以降の閉塞状況を打ち破り、社会的孤立状態から抜け出そうとしたのである。彼らは社会問題への関心を抱くよう学生たちに強く勧めたり、学術的な向上を図ったりすることで、もはや自分たちを「根本主義」とは呼ばず、新しい名称を掲げる決断をした。オッケンガたちは、自らのアイデンティティをモダニストも根本主義もなかった南北戦争以前の Evangelicals に求めたと言える。しかし歴史が不可逆的なものである以上、もはやプロテスタント一般を指す Evangelicals に戻ることはできないと悟っていた。だからこれに New をつけ、新福音主義 (New Evangelicals) と名乗ることにした。彼らの働きは第二次世界大戦後の東西冷戦時代に、ビリー・グラハムの精力的な伝道活動と相まって、かつて「根本主義者」と呼ばれていた人々を「新福音主義」者として束ねていった。

やがて1960年代に入り、もはや Evangelicals は目新しい存在ではなくなり、冠にあった New が取れ、Evangelicals すなわち「福音派」となった。しかしこの流れに公然と反対し、フラー神学校やビリー・グラハムによって福音派が統合されることに最後まで抵抗する勢力があった。これが1980年代に「原理主義者 (Fundamentalism)」として台頭してくる一派である。

次章では、福音派と原理主義者との峻別についてみていくこととする。

¹⁸ 森「アメリカにおけるファンダメンタリズムの歴史」『基督教研究』第46巻、第2号、(基督教研究会、同志社大学神学部、1985年) 231頁

¹⁹ Louis Gasper, *The Fundamentalist Movement*, (Mouton & CO., 1963), 104.

²⁰ Marsden, *Reforming Fundamentalism: Fuller Seminary and the New Evangelicalism*, (William B. Eerdmans, 1987), p. 18.

²¹ Harold J. Ockenga, "From Fundamentalism, Through New Evangelicalism, to Evangelicalism" in Kenneth S. Kantzer, ed., *Evangelical Roots: A Tribute to Wilber Smith*, (Thomas Nelson Inc, 1978), p.38.

²² Carl Henry, *Confessions of a Theologian: An Autobiography*, (Word Books, 1972), p.79.

第3章 福音派と原理主義者

ニューライト

第1章で取り上げた「宗教右派」はその大半が、「ニューライト (New Right)」と呼ばれる共和党内の政治的保守派の招きで政治の世界に参入した牧師・伝道師たちである。1970年代半ば、ニューライトは、ニクソン、カーター両大統領の失政を眺めながら、1979年の次期大統領選挙では何としても共和党が政権奪還を成し遂げなければならないと戦略を練っていた。彼らの中心人物であるポール・ワイリックは、福音派に目を付けた。福音派は、大統領選挙の趨勢を左右するほどの集団であるにもかかわらず、政治的にはほとんど注目を集めておらず、組織化もされていなかった。そんな彼らを組織化し、票を取りまとめようと運動を展開したのである²³。

この誘いに乗ったのが、ジェリー・ファルウェルやパット・ロバートソンである。ファルウェルは「モラル・マジョリティ」、ロバートソンは「クリスチャン連合」という政治団体を各々立ち上げた。彼らの政治団体は、80年代、90年代に巨大な一大組織となり、福音派を共和党支持へと方向づけることに成功した。

ファルウェルもロバートソンも、生来はキリスト教の牧師、伝道師である。共に政治に関しては素人であった。その彼らが、短期間に福音派を政治勢力へとまとめあげることがなぜできたのであろうか。もちろんニューライトの斬新な選挙戦略が功を奏したという一面もあるだろう。実際にワイリックは、2000万人以上の住所録をコンピュータで管理し、これを用いて共和党支持を訴えるダイレクトメールを発送するという、当時では誰も考えないような作戦を展開した²⁴。

しかしそれだけで福音派が動いたわけではない。そこには、ファルウェルやロバートソンのような「牧師・伝道師」でなければ訴えることのできない「手法」があった。ワイリックたちはそこまで読んで、彼らを仲間に引き入れたの

²³ William Martin, *God with on Our Side: The Rise of the Religious Right in America*, (New York: Broadway Book, 1996), p.176.

²⁴ 森「ファンダメンタリストの政治化現象—1980年代の『新宗教右翼』の研究」『基督教研究』第20巻、(基督教研究会、同志社大学神学部、1984年) 37頁

である。

ファルウェルの働き

ファルウェルらが最も強調したのは、アメリカのモラルが失われつつあるという点である。具体的に彼が取り上げた事柄は、中絶問題、同性愛問題、そしてキリスト教教育への公的権力の過干渉であった。

中絶問題は、1973年の「ロー&ウェイド事件」への米国最高裁判所の判決がひとつの転機となった。この判決は、女性の中絶を公的に認める最初の判例であった。これ以降、中絶容認にアメリカは動いていくことになる。同性愛問題については、男女平等を謳った合衆国憲法の修正案(ERA)採択へ向けての運動が盛んになってきたことが挙げられる。

しかし、中絶問題、同性愛問題だけで福音派は動かされたわけではない。これらは宗教的というより、むしろ社会的問題であり、政治的解決を要する事象であった。福音派を政治の世界に誘うことになった決定的な要因は、「キリスト教教育への公的権力の介入」である。公立学校で授業開始時に祈祷したり、聖書の一斉朗読をしたりすることは、アメリカでは日常的なことであった。しかし1970年代以降、これを違法とする判決が州レベルでは出始めていた。1979年、カーター政権は、教育省を設置し、公立学校での祈祷禁止、聖書朗読禁止、(宗教的)私立学校への税特別控除の解除を決定的なものとした。当時、私立学校へ通わせていたのは、公教育からしだいにキリスト教色が無くなっていくことに危惧を抱いた保守的な信仰者家庭がほとんどであった。彼らにとって、教育省設置は単なる法規制ではなく、「キリスト教的価値観(福音主義)の否定」と同義であった²⁵。

ここにファルウェルら牧師・伝道師たちの活躍する余地があったと言えよう。ファルウェルは、中絶、同性愛、キリスト教教育への侵害、これらをひとつにまとめあげ、「アメリカの道徳、すなわち聖書の教えを土台とする国家がおかしくなっている」と訴え、1976年以降、「私はアメリカを愛します(I Love America)」という大会を各地で展開した。やがて1978年からはこの大会名が「ア

²⁵ Martin, *God with on Our Side* p.173.

メリカを浄化しよう (Clean Up America)」となり、さらに規模が拡大していった。彼が福音派をまとめあげるために用いたレトリックは、ニューライトの指導的立場にあったポール・ワイリックの次の言葉に集約されるだろう。

「教義的な違いなど、統一の妨げにはならない。(中略) 聖書や教会の教えに反するものが、逆に私たちを一つにしたのだ」²⁶

このようにして、福音派は政治の世界に導かれていった。

「聖書信仰」という共通性

1982 年、福音派の人々を「兄弟」と呼び、「聖書の教えに基づく国家が揺らいでいる」と訴えたファルウェルらに対し、カール・ヘンリーら新福音主義者たちは決断を迫られた。後に「宗教右派」と呼ばれる同業者 (牧師・神学者) を仲間とみなすのか、それとも異質のものともみなすのか、ということである。そこで各界の代表者—カール・ヘンリー、ジェリー・ファルウェル、神学者・哲学者であるフランシス・シェーファー、NAE 会長のロバート・デュガン—ら総勢 16 名が集まり、話し合いの時を持った。この会議に、福音派の特質が端的に表れていると言えよう。

ヘンリーら新福音主義者たちは、決してファルウェルらの方向性を歓迎してはいなかった。しかしその間違いを指摘し、根拠を挙げて非難することを徹底できなかった²⁷。この逡巡している姿勢を、シェーファー、ファルウェルは突いた。そして「私たちはキリストにあって兄弟だ。なぜなら、共に聖書の無謬性という福音主義の土台を守らなければならないから」と訴えたのである²⁸。ヘンリー、NAE 会長のデュガンは、彼らに反論することはできなかった。なぜなら、ファルウェルが語っていることは、ヘンリーらも同じように信じてきた価値観だったからである。また、ファルウェルらの周りに多くの賛同者が集ま

り、聖書や教会の教えから外れようとしている国家を修正しようと結束しつつあることも、紛れもない事実であったため、強い反論ができなかったという要因もあった²⁹。

これによって大勢は確定した。つまり福音派は、原理主義とマスコミから揶揄されるファルウェルたちを敵とみなせなかったということである。積極的な協力はしないまでも、少なくとも福音派陣営から彼らの活動を批判することはしない、という約束を守らざるを得なくなったのである³⁰。

このような歴史的経緯を振り返るとき、福音派と同時代に生きていた原理主義者たちがなぜ福音派を「兄弟」と呼び、原理主義と揶揄されている自らを「福音派」と称することができたのか、という問いに答えることができる。それは、Evangelicals 全体に「聖書信仰 (professing the Bible)」ともいうべき共通性が存在していたからである。「聖書信仰」とは、聖書の権威、その正統性や真理性を普遍的なものにとらえ、これを土台として世界観を構築することである。理性に基づいて、聖書の記述や聖書から導き出される教義、教理を精査し、その結果として聖書の正しさを確認するのではなく、むしろ逆に「絶対に正しく、間違いないもの」として、まず聖書を「信じる」ことが求められている。これは聖書そのものを「信仰対象」にするといってもいいであろう³¹。

この「聖書信仰」を、論理性、合理性を欠いた偏見と切り捨ててしまっただけではない。近代以降、過去の集積から法則や理論が生み出され、それに基づいて未来を予想するという科学的世界観が一般化してきた。しかしこれは、あくまでも一つの世界「観」であって、すべてではない。一方でまったく異なる世界観も存在した。まずアプリオリに世界の「枠組み」を設定し、それに合うように現実を生み出していくやり方である。

例えば、アメリカという国はこの「枠組み (世界観)」抜きには語り得ない歴

²⁶ Edward E. Plowman, "Is Morality All Right?," *Christianity Today*, November 2, (1979), p.84.

²⁷ Carl Henry, "The Fundamentalist Phenomenon," *Christianity Today*, September 4, (1981), p.30.

²⁸ Susan Harding, *The book of Jerry Falwell: Fundamentalist Language and Politics*, (Princeton University press, 2000), p.149.

²⁹ 例えるなら、論争相手からいきなり水戸黄門の印籠を出されたようなものである。聖書の「真理性」を主張する者に反論することは、「真理性」に与しないリベリズム神学のやることになってしまう。

³⁰ Harding, *The Book of Jerry Falwell*, p.150.

³¹ 青木保憲『アメリカ福音派の歴史 聖書信仰にみるアメリカ人のアイデンティティ』(明石書店、2012 年) 476 頁

史を持っている。国家が共通の過去を持たない移民たちによって形成されているため、彼らが統一された国家観を持つためには、「共通の未来」としての枠組み、すなわち理念、理想、信条で繋がるしかない³²。「神に導かれた第二のカナ＝アメリカ」という世界観を植民地の住民たちが信じられたからこそ、アメリカの建国は成し遂げられ、歴史的「事実」となり得たのである。そういった意味で、アメリカ福音派の「聖書信仰」はむしろ肯定的にとらえるべき概念であると言える。

しかしここで一つ疑問が残る。それは、21世紀の現在でも、本当に福音派と原理主義者を峻別することはできないのか、という問いである。次章では、この原理主義者の現在と福音派との関係を1980年代で終わらず、21世紀の視点から30年前を分析していく。そのための大きな判断材料となったのは、あの2001年の「9.11」事件である。

第4章 「仮想戦争」を戦う原理主義者

アメリカ福音派研究の第一人者ジョージ・マースデンは、1991年に著作の中で「原理主義者とは、何かに怒っている福音派である (a fundamentalist is an evangelical who is angry about something)。」と述べた³³。彼のこの表現は、原理主義者に対する研究者たちの一つの見解として定着している。しかし「何かに怒っている」では、余りに具体性を欠くものであることは否定できない。本章では、「何に怒っているのか？」について21世紀の視点から考察していく。

「9.11」が炙り出したもの

2001年9月11日、ニューヨークの貿易センタービルと国防総省に対する同時多発テロが、後に「9.11」として歴史に刻まれる。この事件は各界にはかり知れない影響を与えているが、それは単にオサマ・ビン・ラーディンに組織されたイスラーム過激派（ジハード衝動主義者）の特異性を顕わにただけでな

³² 森「第4章 宗教」五十嵐武士・油井大三郎編『アメリカ研究入門 [第3版]』（東京大学出版会、2003年）56頁

³³ Marsden, *Understanding Fundamentalism and Evangelicalism*, (Grand Rapids, Eerdmans, 1991), 1.

く、アメリカの原理主義者たちの特性を如実に炙り出すこととなった。例えば小説『レフト・ビハインド』の作者として有名なティム・ラヘイ牧師は「この事件（9.11）は終末的事件の最たるもの」と表現している³⁴。また9.11から2日後に、ジェリー・ファルウェルとパット・ロバートソンはテレビで対談し、「このテロは、アメリカの墮落ぶりに対して、神がアメリカの敵に攻撃を認可した結果ではないか」と論じ合っている³⁵。

また、政治の世界でも同様の論調が益々強まってきた。ジョン・マケイン上院議員は、「この敵は、我々が抛り所とし、信じているものすべてを破壊しようとする、理解の範疇を超えた存在である」と発言している³⁶。ファルウェルとロバートソン対談の翌日に、ブッシュ大統領はワシントンD.C.で行われた追悼合同礼拝で、「世界は善と悪の二つに引き裂かれてしまった。勝利に行き着くためには、世界から悪を退治する必要がある」と宣言し、アメリカの世論はこれを概ね歓迎している。³⁷ 2002年1月29日の一般教書演説で、彼は「悪の枢軸」発言を行っている。最も直截的だったのは、ビン・ラーディン追跡担当のウィリアム・ボイキン陸軍中將である。彼は「敵の名はサタン。サタンは一国としてのわれわれを滅ぼそうとし、キリスト教徒軍としてのわれわれを敗北させようとしている」と語っている³⁸。

一連の発言に共通しているのは、アメリカや中東などの現実的な世界での争いや出来事について述べているにもかかわらず、まるで時空を超えた天界で行われている「善と悪の戦い」であるかのような用語が飛び交っていることである。このような思考の枠組みを、社会学（宗教学）者のマーク・ユルゲンスマイヤーは「仮想戦争（Cosmic War）」と表現している。彼は次のように述べる。

³⁴ Gary Wills, "A Country Ruled by Faith," *The New York Review of Books*, November 16, 2006. レザー・アスラン『仮想戦争 イスラーム・イスラエル・アメリカの原理主義』白須英子訳、(藤原書店、2010年) 26頁より孫引き。

³⁵ その時の様子は、以下のアドレスからアーカイブスで確認できる (2014年8月14日確認)。http://youtu.be/H-CAcdta_8I

³⁶ アスラン『仮想戦争』26頁参照。

³⁷ Charles Babington, "Bush: U.S. Must 'Rid the World of Evil'", *The Washington Post*, September 14, 2001.

³⁸ アスラン『仮想戦争』27頁参照。

「私がそうしたイメージを『コスミック』と呼ぶのは、それらが現実以上に誇張されているからである。それは伝説となった過去の大戦争を想起させ、善と悪の形而上の対立に結びつける。(中略) 宗教暴力をとりわけ野蛮で情け容赦ないものになっているのは、その犯行者が聖なる戦争、すなわちコスミック (仮想) 戦争という宗教的イメージを世俗の政治闘争に用いてきたからである。そのために宗教テロ行為は、政治戦略における戦術としてばかりか、はるかに大きな宗教的対立を喚起させるものとして、その役割を果たしている。」³⁹

前章までで考察したように、原理主義者たちは自分たちの世界観を否定する諸事象 (中絶容認、同性愛容認、学校からキリスト教的要素の排除など) が立ちはだかってきたとき、これに立ち向かう姿勢を露わにした。しかしこれまではあくまでも「神の国＝アメリカ」内部の出来事であった。そのため、国内で意見を異にする人々との対立はそれほど鮮明ではなかったと言える。しかし「9.11」はこれまでの諸事象とは全く異なる。まず、アメリカ本土が「争いの現場 (戦場)」となったこと。そしてこの争いが「アメリカ合衆国」に対する外国からの攻撃であったことである。

本章の冒頭で取り上げたマースデンの言葉のように、原理主義者が「何かに怒っている」ことは分かっても、それが何か、そしてそれがどこからくるのか、今までは分からなかった。しかし「9.11」という事件は、原理主義者の世界観を図らずも炙り出したと言える。それが「仮想戦争」である。では、原理主義者は何に怒っているのか。彼らは「悪の勢力」に対して怒っているのである。彼らは聖書で描き出された「悪の勢力」が現代に影響を及ぼしていることに対し、聖書の物語や用語になぞらえた「義憤」を表明していると言ってもいい。そうすることで、自分たちは「善＝神」の側に立つ「神の民」であることを確認するのである。レザー・アスランは、「仮想戦争は領土や政治政策をめぐる争いではなく、帰属意識をめぐる戦いである」と述べているが。これは正鵠を射たものであろう⁴⁰。彼らは「9.11」という非常事態に遭遇することで、「神の意

志で建国され、守られている国家＝アメリカ」の民であるというアイデンティティの危機に遭遇した。そして、「悪の勢力」が圧倒的になってきたことを実感すればするほど、逆に「神の怒り」という大きな力で「悪」が駆逐されることを期待するようになっていったのである。

このような思いに駆られて行う所業は、他の人々から見ればあまりに破壊的で、敗北的であることの方が多い。しかし原理主義者にとって、目の前の現実が悲惨であり絶望的であるほど、逆に彼らの「信仰」は強くなり、「仮想戦争」に没入しやすくさせる。もし「敗北」があるとしたら、それはこの「善と悪との戦い」から逃げ出すことである。

原理主義者とは誰か？

本章の目的は、「福音派」と「原理主義者」とを峻別することである。今まで内に秘められていた「仮想戦争」の世界観が、「9.11」によって露わになったことで、この点ははっきりしたように思う。つまり原理主義者は善悪の二元論的思考が福音派よりも強く、そして自らを善の一員として考える傾向が強いということである。本来、福音主義の中心にあるのは、キリストの十字架による罪からの解放であり、これを可能にする条件として「罪の悔い改め」をして、「罪赦されし罪びと」の恵みを頂くことである。しかし彼らは、いつしか極端な意味で自らを「神の一員」ととらえ、他者を「悪」と断罪し、その裁きに加担することこそ、与えられた使命と考え始めたのである。

このような転換の根拠として彼らが用いたのは、神の言葉としての「聖書」であった。聖書の無謬を原則とするなら、好戦的な箇所だけを「無意味」または「誤り」として退けることはできなくなる。これらの箇所を単なるレトリックや喩えではなく、「字義通り」神からのメッセージとして受け取るなら、原理主義者の主張は「聖書的」な解釈の一つとされ、賛同する者が後を絶たないのも頷ける。特に旧約聖書の中には、神がイスラエルの民に戦争をも辞さない態度で異邦人に向き合うよう指示する場面が多く出てくる。事実、1998年に中絶手術を行う医師たちに対し暴行を加える事件が頻発したとき、逮捕された首謀者たちが主張したのは「出エジプト記」15章3節の「主はいくさびと」というフレーズであった。彼らは、「信者は、神と同じことをしなければならない」と

³⁹ マーク・ユルゲンスマイヤー『グローバル時代の宗教とテロリズム いま、なぜ神の名で人の命が奪われるか』古賀林 幸・櫻井元雄 訳、(明石書店、2003 年) 274 頁

⁴⁰ アスラン『仮想戦争』21 頁

主張した⁴¹。同じような概念を伝えるフレーズは、聖書の随所に見受けられる。例えば次のような箇所である。

「わたしたちの戦いは、血肉を相手にするものではなく、支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊を相手にするものなのです。」⁴²

同じ聖書を用いていながら、愛と赦しを説く者もいれば、このように自らを「神の兵士」のごとく考え、行動する者もいる。これは「聖書信仰」を抱く（原理主義者と福音派を含めた）キリスト教保守派の宿命的な功罪である。つまり「仮想戦争」の世界観は、その程度の差こそあれ、すべての福音派に内在している。「悪の勢力」という用語を、「迷惑をかける隣人」という日常レベルで用いるか、それとも「9.11」を引き起こしたビン・ラーディンのように「世界的テロリスト」に対して用いるか、の違いはある。しかし、「神と悪魔」「善と悪」がせめぎ合う世界のはざまに私たちが生きていると考えることは、聖書に忠実であることを表明しているキリスト者であれば、誰もが内に抱く感覚である。クリスチャン・スミスは、「福音派は、反对者や脅威を与える存在によって苦境に立たされ、かえって強靱になっていく」と述べ、「善と悪の戦い」という世界観が福音派の成長に不可欠であると分析している⁴³。

さらに言えば「9.11」以降、この「仮想戦争」の世界観は、多くのアメリカ人に内在していることが明らかにされた。今までであれば、このような過激な発言を上院議員や軍人、そして大統領が公式に行うことはなかった。しかし公人がこのような発言をし、国民からの圧倒的な支持を保持したまま、現実にイラク戦争は始まった。さらに民主党オバマ政権になってもなお、この一連のアメリカ政府の動きを支持する者は相当数存在している。そういった意味でも、「9.11」は国家誕生以来の非常事態だったと言える。「9.11」は、原理主義者や福音派だけでなく、程度の差こそあれ、全アメリカ人のアイデンティティを刺激したとも言える。アメリカ人が建国以来抱いてきた国家創造の物語（アメリカは神によって打ち立てられた国家であり、神の守りの中にあるという考え方）

⁴¹ ユルゲンスマイヤー『グローバル時代の宗教とテロリズム』274頁

⁴² エフェソの信徒への手紙6章12節（新共同訳聖書）。

⁴³ Christian Smith, *American Evangelicalism, Embattled and Thriving*, (The University of Chicago Press, 1998), p. 89.

は、本質的に現代にも受け継がれている。そんな彼らの特異な世界観は、「9.11」を体験することで原理主義者たちが表した「怒り」という極端な形を通して、世界に示されたということもできよう。

「仮想戦争」という世界観は、決して狂信的で特別に偏った人々のものではない。「聖書信仰」を抱いている者なら誰でも、原理主義者となる可能性を秘めていることになる。福音派と原理主義者を峻別することが本章の目的である。しかし、だからこそ単純に白黒の判別がつく、と考えることはできない。それは原理主義者が用いる極端な善悪二元論であり、それは原理主義者を批判しておきながら、今度は私たちが「仮想戦争」の世界観で彼らを断罪することになってしまう。むしろ福音派と原理主義者とは、根本主義者をルーツに持つ歴史的兄弟であることを素直に認め、「仮想戦争」を肥大化させるような対立関係に踏み込まないことである⁴⁴。「福音派」と「原理主義者」、両者の違いはグラデーション的なものであり、その各々の段階が並び立つ中で、アメリカは今日も歴史を紡いでいるのである。

おわりに

今までの考察で明らかになったように、「福音派」という概念は19世紀末から1920年代までの「根本主義者」、そして1980年代以降の「原理主義者」とは、とても近い関係にある。聖書を合理的・理性的視点から見てその矛盾点を突くというリベラリズムからの脅威に対して、福音派は聖書の正しさを守ろうとするあまり、根本主義者または原理主義者となる危険性がある。一方、自分たちと意見を異にする者や反対する者からの脅威に対して福音派が怒りの感情に駆られるなら、その感情を正当化する「仮想戦争」のロジックに傾倒し、原理主義者となる危険性もある。

「福音派」という用語には、このような危険性が常に内包されていることを率直に認めるべきである。用語を峻別するのは、決して「福音派」を完全無欠な存在に祭り上げるためではない。福音派は容易に「根本主義者」「原理主義者」

⁴⁴ アスランは、「仮想戦争」に勝利するために「彼らと同じ土俵に乗らず、二極化を推進しようとする宗教的レトリックを排除することである」と述べている（29頁）。

となってしまう可能性がある。だからこそ、各々の概念が生み出された歴史的背景を理解し、その間にグラデーショナルに存在する個々の「福音主義者」の存在を常に意識しなければならないということである。このような目的のために各用語を定義し、峻別することは、『ジーザス・キャンプ』のようないわれなき画一的レッテル貼りから、真に福音派を解放することになると筆者は確信している。

(大阪城東福音教会)